

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を入れ、下線部（1）～（5）に関する各設問に答えなさい。

道、なかでも、交通上主要な道路である街道は、現代日本社会においてはありふれた存在である。例えば、県道や国道はそこかしこを通り、高度成長期に急速に整備された高速道路網ですら、ガス・水道・電気といったライフラインと同様に、もはや日常的なインフラとなっている。自然災害や事故、また渋滞といった障害要素は常にあるものの、これらの現代の街道は、カーナビゲーションシステムや運転補助システム等の自動車関連技術の進歩の恩恵も受けつつ、比較的安全且つ容易に目的地に達することを可能としている。

しかし、歴史を紐解けば、規模や技術水準の差はあるにせよ、高度に整備された街道網は決して現代文明の発明ではないことが分かる。地中海世界に限っても、ミケーネ文明が栄えていた青銅器時代のギリシアでは、物資運搬のために街道が建設され、さらに時代が下りアケメネス朝ペルシアでは、「王の道」と呼ばれる街道が整備され、その中の一つは王都スサとかつてのリディア王国の都で小アジアの支配拠点であった（ A ）を結んでいた。そして、古代地中海世界においてとりわけ街道整備に注力したのがローマ人である。「全ての道はローマに通ず」という格言はあまりにも有名であるが、そのローマ街道の代表的存在が（ B ）街道である。<sup>(1)</sup>この街道は、当初ローマとカプアを結ぶために建設され、後に南イタリアのブルンディシウムまで延長されることとなる。ローマ市付近では現在でも石畳で舗装され一直線に伸びる（ B ）街道の美しい姿を目にすることができる。ローマ街道は、ローマの版図拡大に伴い各地で整備され、元首政期には帝国中に網の目のごとく張り巡らされることとなったが、誤解してならないのは、こうしたローマの街道整備の主要な目的は軍事的なものであり、そして平時においても、円滑な地方統治を支える行政インフラ的性格が強かったということである。このことは、上述の「王の道」や、15～16世紀に南米アンデス地方を中心に繁栄したインカ帝国が構築した街道網にもある程度当てはまる特徴であり、そのインカ帝国では、首都（ C ）を中心に街道が整備された。

自動車で移動する現代人の感覚からすれば、街道網の整備と円滑な移動は同義となるが、前近代においては必ずしもそうではなかった。その理由は、移動の手段が徒歩あるいは人・動物による運搬に限られたからであり、その人・動物が休養し、場合によってはそこで交代も可能である施設が沿道に必要であったからである。そのため、上述のアケメネス朝ペルシア、ローマ、インカ帝国といった国家は、街道沿いに宿駅等を設置する（ D ）制の整備にも取り組んだ。

地中海世界の西側においては、476年に西ローマ帝国が消滅し、旧帝国領を覆うローマ街道網を一元的に管理する政治権力はもはや存在しなかったが、しかしそれによってローマ街道が完全に放棄されたわけではなかった。実際に、<sup>(2)</sup>中世においても一部の街道は使用され続け、その存在が歴史的出来事に影響を与えることすらあった。例えば、8世紀前半、<sup>(3)</sup>現在ではフランス・スペインの国境

となっている山脈を越えてメロヴィング朝フランク王国に侵入してきたイスラーム軍を、フランク軍率いるカール＝マルテルが、732年、( E ) の戦いにおいて撃退したが、この戦いが発生したのはまさに( E ) を通るローマ街道の付近であり、この当ても街道が軍事的性格を有していたことが窺える。

しかし、中世前半期には、西欧ではローマ街道のような本格的な街道の新規整備はほとんど行われず、中世も半ばになるとローマ街道もその多くが使用されなくなった。その代わりに人々が多く利用したのが、村や町を結ぶより小規模な道であり、こうした地域や生活に密着した道路網が新たに整備されることもあった。そして中世後期になると、再び都市間を結ぶ街道網が重視されるようになり、フランスや神聖ローマ帝国では、街道が王や皇帝の管轄・所有権の下に置かれ、通行人から各種の税金が徴収されることとなる。

ところで、輸送コストの観点から輸送手段を考えた場合、近代に至るまで比較的安価な輸送手段であったのは海上輸送であり、それに河川等の内陸水運が続いた。それに対し、陸上輸送は、全般的にコストが高く、特に長距離・大量輸送には不向きであった。それゆえ、18世紀後半のイギリスでは、安価な大量輸送を目的として( F ) がさかんに建設され、当時は「( F ) 時代」と呼ばれた。そうした状況に劇的な変化を引き起こしたのが、19世紀前半に登場した鉄道であり、具体的には( G ) によって実用化された蒸気機関車の活躍であった。一方、同じ陸上輸送でも、街道による輸送は依然として高コストのままであり、とりわけ大量輸送の面では鉄道に太刀打ちできなかった。

こうした状況に転機をもたらしたのは、自動車、なかでも速度と耐久性に優れたガソリン自動車の普及である。ドイツの( H ) とベンツは、ガソリン自動車の発明において多大な貢献を為し、それぞれ( H ) 社とベンツ社を設立した。しかし、ガソリン自動車の普及に先鞭をつけたのは19世紀末から20世紀初めにかけてのフランスやアメリカの自動車生産者たちであった。さらに、これらの生産者たちの後に続き、ガソリン自動車の普及を飛躍的に進展させたのがアメリカの実業家フォードであり、彼は「組み立てライン」方式を採用することでT型フォードの大量生産とそれに伴う価格低下を実現し、アメリカにおいて自動車の大衆化を推し進めたのであった。こうしてヨーロッパやアメリカにおいて、第一次世界大戦を境に「街道上の乗物」として馬車に取って代わりつつあった自動車は、とりわけ鉄道駅から遠く離れた農村部や都市郊外において貴重な移動・輸送手段となったのである。

その一方で、各国では自動車道路の整備も進んだ。ドイツでは、アメリカなどに比べて自動車の大衆化は遅れていたものの、政権獲得直後のナチ党が、<sup>(4)</sup> ヴァイマル共和国時代から計画され実際に一部完成していた( I ) と呼ばれる高速道路の建設を失業者救済のための目玉政策として大々的に実行した。この高速道路の建設は、第二次世界大戦中に中断したものの、戦後に再開され、現在ではドイツ国内での総延長距離が1万3千キロメートルに達している。

20世紀後半になると、車社会化（モータリゼーション）は世界的に進展し、かつて陸上輸送の花形であった鉄道に自動車が取って代わることとなる。我が国においても、高速道路やその他の高規格幹線道路が次々に建設される一方で、地方を中心に鉄道路線が相次いで廃止されている。しかし、

近年我が国においては、自動車道路と自動車は共に大きな壁に直面している。すなわち、道路は1950年代～60年代の高度経済成長期に日本全国で急速に整備が進んだが、建設から半世紀を経た現在、道路の一部といえる橋梁やトンネルの維持管理が問題となっている。他方、自動車については、国内では自動車輸送の担い手不足という問題が近年顕在化しつつあるが、世界的には自動車による環境面への負荷が大きな問題となっている。従来型の自動車は、<sup>(5)</sup>化石燃料を動力源としていることから二酸化炭素などの温室効果ガスを発生させ、それゆえ現在深刻な問題となっている地球温暖化に拍車をかける要因でもある。

地球温暖化を巡っては、既に1997年に開催された気候変動枠組み条約の第3回締約国会議において、二酸化炭素などの温室効果ガスを1990年当時の水準に比べ2008年～2012年には5.2パーセント削減することを定めた京都議定書が決定されている。さらに、2015年に開催された国連気候変動枠組み条約第21回締約国会議（COP21）では、温室効果ガスの排出量を21世紀後半には実質的にゼロとすることを目標とし、全参加国が削減目標を5年毎に更新することを取り決めた（ J ）協定が採択された。こうした情勢を受け、各国の自動車メーカーは、走行中に二酸化炭素を発生させない水素や電力をエネルギー源とした、環境への負荷の小さい自動車の開発に注力しており、その開発競争はますます熱を帯びている。一方、人手不足解消の切り札ともされる無人運転技術の進歩も目覚ましい。

設問（1）この区間に含まれるローマ市近郊では、街道沿いに複数の地下墓所が作られ、迫害期のキリスト教徒はそこを礼拝所として利用した。このような地下墓所は何と呼ばれるか、記しなさい。

設問（2）イングランドでは、英仏海峡に面するドーヴァーからロンドンに至るローマ街道が、後にワトリング・ストリートと呼ばれる街道の一部となり重要な役割を果たした。この区間の途中にあるカンタベリには大聖堂が置かれたが、このカンタベリの大司教にも就任した「スコラ学の父」とも呼ばれる実在論の代表的論者は誰か、記しなさい。

設問（3）イベリア半島の付け根部分を東西に横断するこの山脈の名前は何か、記しなさい。

設問（4）ヴァイマル共和国の初代大統領は誰か、記しなさい。

設問（5）化石燃料の一つである石油に関連し、サウジアラビア・クウェート・リビアによって1968年に設立され、1973年に第4次中東戦争が発生した際、イスラエルの友好国に対して石油の全面禁輸を宣言した組織の名前は何か、記しなさい。

II 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を入れ、下線部（ 1 ）～（ 5 ）に関する各設問に答えなさい。

1875年、日本は朝鮮と武力衝突し、<sup>(1)</sup>翌1876年に日本に有利な不平等条約である日朝修好条規を締結したが、朝鮮やその宗主国の清は日朝修好条規が伝統的な華夷秩序を損なうとは見なさなかった。朝鮮では1882年に軍隊が漢城で反日・反閔氏政権の反乱を起こすと、それに乗じて国王の高宗の父である（ A ）が政権について、高宗の妃である閔妃の一族を排除しようとしたが、清軍の介入を後ろ盾にした閔氏に再び権力を奪われて短期間で失脚した。その後、日本に接近した開化派が、清との関係を重んじる閔氏一族などと対立を深めて、<sup>(2)</sup>1884年に開化派の金玉均らが閔氏政権の打倒と国政改革を目指してクーデターを起こし、日本軍がこれに加わったが、袁世凱らの指揮する清の駐留軍に鎮圧されて、朝鮮における清の影響力が強まる結果に終わった。

1894年、東学という新宗教の幹部・全捧準が反乱を起こすと、それを鎮圧するために朝鮮半島に出兵した日清両国が対立して開戦する事態に至り、日本が勝利して1895年に下関条約が締結された。この条約によって、日本は清に対して、朝鮮が完全な独立国であることを認めさせ、さらに（ B ）、台湾、澎湖諸島を割譲させたが、これらのうち（ B ）はロシア、ドイツ、フランスの勧告によって、日本から清に返還された。日清戦争の後には、帝国主義列強による中国の領土・利権の獲得競争が激化した。それに出遅れていたアメリカ合衆国の国務長官ジョン＝ヘイが二度にわたって（ C ）宣言を発し、（ C ）、機会均等、領土保全の3原則を提唱した。

日清戦争後、朝鮮は1897年に国号を（ D ）に改めて、下関条約で認められた自主独立の国であることを示した。1904年には、満洲と朝鮮半島をめぐる対立する日本とロシアが開戦した。両国は1905年にポーツマス条約を締結し、日本は朝鮮半島における優越権をロシアに認めさせると、同年に第2次日韓協約を強要して（ D ）を保護国化し、伊藤博文を初代統監として派遣した。しかし、愛国啓蒙運動や義兵闘争に参加していた朝鮮の独立運動家である（ E ）は、1909年にハルビン駅で伊藤博文を射殺した。その翌年、日本は武断統治にもとづく朝鮮半島の植民地支配を開始した。

清では日清戦争の敗北によって国家の存亡に対する危機感が高まり、1898年、光緒帝は康有為や梁啓超らを登用して、日本などを手本とした政治改革を実施しようとしたが、西太后は光緒帝を幽閉し、同年のうちに改革を終結させた。しかし、清は1900年に起きた義和団戦争に敗れ、1901年に多額の賠償金や北京等での駐兵権などを認めた北京議定書を11カ国と締結すると、本格的な政治改革に取り組むようになった。その一環として、隋・唐時代に始まった官吏登用試験制度である（ F ）が1905年に廃止されて、海外での学位取得も官位取得の条件の一つに認められた。このことは、<sup>(3)</sup>日露戦争に日本が勝利したこととあまって、清から日本への留学生が増加することにつながった。

広東出身の孫文は、1894年にハワイで華僑を中心に興中会を結成し、翌年には香港に本部を置いて広州で蜂起したが失敗し、日本に亡命した。1905年には孫文の興中会をはじめとする革命諸団体が結集

して、東京で（ G ）を組織した。（ G ）は機関紙『民報』を刊行して、「民族・民権・民生」などの革命思想を広げた。他方、清の新政は、改革にともなう増税やその中央集権的な性格から、地方の有力者や民衆の反発を招いていた。1911年、四川省では鉄道国有化反対運動が活発に展開され、革命派の働きかけもあってそれが武装蜂起に発展する。こうしたなかで、宋教仁らは上海で（ G ）中部総会を結成し、湖北分会も設け、武装蜂起を準備していた。捜査の手が迫るなか、革命党員の新軍將兵などが（ H ）で蜂起を発動し、現在の武漢市を構成する（ H ）・漢口・漢陽を制圧する一方、湖北省の有力者などと協議して国号を中華民国と定めて湖北軍政府を樹立すると、諸省がそれに続いた。これをアメリカ合衆国で知った孫文が1911年末に帰国すると、革命軍は孫文を臨時大總統に選出し、1912年1月に南京で中華民国の建国を宣言した。

清側は、北洋新軍の首領である袁世凱を起用して革命側との交渉にあたらせたが、袁世凱は清朝を見限って皇帝の退位を承諾するとともに、孫文から臨時大總統の地位を譲り受け、北京でそれに就任した。1912年に清朝最後の皇帝である（ I ）帝が退位して清朝は滅亡し、二千年以上にわたる中国の皇帝政治は終わりを告げた。中華民国は清の版図を継承し、例えば、清末から自立路線を強めていた外モンゴルは、辛亥革命に際して独立を宣言したものの、中華民国はそれを認めなかった。しかし、（ J ）らが創設に参加したモンゴル人民党（1924年にモンゴル人民革命党に改称）は、ソヴィエト赤軍などの協力を得て1921年に独立を達成し、1924年にモンゴル人民共和国の成立を宣言した。1939年から1952年までモンゴル人民共和国の首相を務めた（ J ）は、1939年にはソ連軍の全面的支援を受けながらノモンハン事件で日本軍を撃退している。

辛亥革命後の政治の混迷に失望した中国の知識人たちのあいだでは、西欧の近代文明を紹介し、儒教に代表される旧来の道徳や文化の打破を提唱する新文化運動が始まった。<sup>(4)</sup>陳独秀が1915年に上海で創刊した啓蒙雑誌の『青年雑誌』は、翌年に『新青年』と改称されて、新文化運動を推進し、中国共産党の成立後にはその機関誌になった。他方、日本に併合された朝鮮では、朝鮮総督府が言論・出版・集会・結社の自由を奪う武断政治を強行したが、アメリカ合衆国のウィルソン大統領が十四カ条の平和原則を発表し、世界で民族自決の気運が高まるなか、<sup>(5)</sup>知識人たちが「独立宣言」を発表すると、民衆が「独立万歳」を叫んで立ちあがった。同年の中国では、北京でヴェルサイユ条約に抗議するデモがおこって全国的な愛国運動に発展した。それを受けて中国政府は、第一次世界大戦に敗れたドイツの山東利権を日本へ譲渡することになっていたヴェルサイユ条約の調印を拒否した。

設問（1）1876年に締結された日朝修好条規によって開港されたのは，釜山・元山のほかにどこか，都市名を記しなさい。

設問（2）このクーデターの名称を記しなさい。

設問（3）日露戦争後の日本には，清のほかにベトナムからも多くの留学生がやってきた。ファン＝ボイ＝チャウの提唱で開始された，ベトナムから日本への留学運動の名称を記しなさい。

設問（4）新文化運動を指導した陳独秀が『新青年』で旗印に掲げたスローガンを記しなさい。

設問（5）朝鮮の三・一独立運動と中国の五・四運動が起こったのは何年か，アラビア数字で記しなさい。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句やアラビア数字を記入しなさい。

14世紀の初め、イラン北西部のアルダビールを拠点としてサファヴィー教団が成立した。このイスラーム神秘主義教団はトルコ系遊牧民の支持を集め、15世紀半ば以降、彼らの軍事力を利用して敵対する勢力と争うようになった。このトルコ系遊牧民の信者は、トルコ語で「赤い頭」を意味する（ A ）と呼ばれた。15世紀末、この地域を支配していたトルコ系の遊牧部族連合であるアクコユンルの統一が失われると、サファヴィー教団の教主イスマーイールは、1501年、アクコユンルの首都であった（ B ）を征服し、サファヴィー朝を開いた。その後も次々とアクコユンル領を吸収したサファヴィー朝は、イランの中部と西部、イラク、アナトリア東南部を支配する一大勢力となった。サファヴィー朝の初代王となったイスマーイールは、ペルシア語で王を意味するシャーの称号を用い、シーア派の一派である十二イマーム派を国教とすることを宣言した。以後、サファヴィー朝下の社会で進められた十二イマーム派化は、スンナ派イスラーム王朝であるシャイバーン朝やオスマン朝との関係に一定の影響を及ぼした。

中央アジアでは、チンギス＝ハンの血を引くシャイバーニー＝ハンが、分裂状態にあったウズベク人の遊牧集団を統合し、1500年、マー＝ワラー＝アンナフルと呼ばれるアム川からシル川にかけての地域にシャイバーン朝を樹立した。1507年にヘラートを征服して（ C ）朝を滅ぼしたシャイバーン朝は、イラン北東部を中心とするホラーサーン地方にまで支配領域を広げ、サファヴィー朝と敵対するようになった。サファヴィー朝軍を率いるイスマーイールは、1510年、ホラーサーン地方の都市メルヴの近郊でシャイバーン朝軍に大勝し、この地方を獲得した。このときアム川下流域のホラズム地方もサファヴィー朝の支配下に入ったが、ウズベク人がサファヴィー朝からホラズム地方を奪回し、1512年にイルバルス＝ハンを君主とする新たな国を建てた。17世紀前半に首都を（ D ）に遷したことから、この国を一般に（ D ）＝ハン国と呼ぶ。他方、シャイバーン朝軍に敗れてサマルカンドを追われた後、北インドへの進出を開始したバーブルは、1526年に（ E ）の戦いでデリー＝スルタン朝の最後の王朝であるロディー朝の軍を破り、ムガル朝を創始した。

アナトリアを支配するオスマン朝にとって、イランを中心に台頭するサファヴィー朝は新たな脅威となった。1512年にオスマン朝のスルタンとなったセリム1世は、東方遠征を敢行し、1514年にアナトリア東部のチャルディランでサファヴィー朝軍を撃破した。その後、サファヴィー朝の首都である（ B ）に入城したセリム1世は、そこで優れた職人や芸術家たちを捕虜とした。スレイマン1世の治世に活躍する著名な宮廷画家シャー＝クルがその一人であったように、このことはオスマン朝の文化の発展に大きな意味を持った。また、アナトリア北西部の商業都市ブルサには、イラン産の絹を求めて多数のイタリア商人が訪れていたが、オスマン朝とサファヴィー朝との抗争は、こうした商業活動にも影響を与えた。東方遠征の後、セリム1世はシリアにも進出し、（ F ）年にマムルーク朝を滅ぼした。その結果、オスマン朝はシリアとエジプトをその領土に加え、イスラームの二大聖地で

あるメッカとメディナの保護権を得た。

サファヴィー朝との戦いでシャイバーニー＝ハンを失ったシャイバーン朝では、16世紀半ばまで王族内の有力家系による地方分権的な支配が続いた。16世紀後半、王族の間で抗争が起こると、そのなかで頭角を現したアブドゥッラー＝ハンが王朝の再統一を果たし、中央集権化を推し進めた。アブドゥッラー＝ハンは、首都である（ G ）の開発にも尽力し、新たな城壁を建設して市域を拡大したほか、教育施設であるマドラサや、屋根付き市場などの商業施設、公衆浴場などを建てた。当時の中央アジアの政治と社会に大きな影響力を持っていたナクシュバンディー教団も、モスクや隊商宿などを建設することで、この都市の開発に貢献した。かつてサーマーン朝の首都として繁栄した（ G ）は、こうして16世紀後半に再び大きな発展を遂げたのである。

オスマン朝では、1520年に第10代スルタンとなったスレイマン1世が、直ちに西方への遠征を開始した。1521年にハンガリー王国の防衛拠点であるベオグラードを攻略した後、1526年に（ H ）の戦いでラヨシュ2世の率いるハンガリー軍に勝利し、1529年にはウィーンを包囲した。サファヴィー朝に同調するトルコ系遊牧民の反乱などを受け、東方に向けても大規模な遠征を行ったスレイマン1世は、バグダードを含むイラクをサファヴィー朝から奪取し、ペルシア湾からインド洋に通じる海上ルートの拠点を確保した。広大な領土と強力な軍事力を持ち、ヨーロッパ諸国から「壮麗王」と称されたこのスルタンは、首都イスタンブルに荘厳なスレイマン＝モスクを建て、自らの権威と王朝の繁栄を誇示した。このスレイマン＝モスクの建設を指揮した宮廷建築家である（ I ）は、大ドームや細いミナレットを特徴とするモスクの様式を確立し、1588年に没するまで多数の公共施設の建設に携わった。

サファヴィー朝では、1524年に第2代王となったタフマースプが、（ A ）の勢力を抑えて政情を安定させ、度重なるオスマン朝軍やシャイバーン朝軍の侵攻を巧みに凌いだ。しかし、彼の約50年に及ぶ治世の後、王族や（ A ）の権力闘争によって再び統一が乱れ、オスマン朝軍に（ B ）を含むイラン北西部を奪われると、王朝は存続の危機に陥った。第5代王となった（ J ）は、この状況を打開すべく中央集権化と軍制改革を進め、さらにはオスマン朝に奪われていたイラン北西部などの失地を奪回し、サファヴィー朝の最盛期を現出したのである。



IV 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

「太陽の沈まぬ帝国」という言葉は、16世紀にアメリカ大陸で支配圏を築いたスペイン帝国について使われはじめた。しかし、このフレーズが最もよく当てはまるようになったのは、最盛期に地球上の陸地の4分の1を支配したイギリス帝国だった。七年戦争の結果としてイギリスの領土が飛躍的に拡大すると、1773年に（ A ）はイギリス帝国を「太陽が沈むことなく、自然がその境界を定めていない広大な帝国」と表現するようになった。イギリス帝国の領域はあらゆる大陸におよび、島嶼部を含んで地球の全体に広がっていく。もっとも、（ A ）は1793年、イギリスから正式使節として清朝に派遣された際、乾隆帝に謁見はかなったが貿易交渉はできずに帰途についた。

ヨーロッパでは、15世紀からの大航海時代をポルトガルとスペインが牽引していたが、イギリスからも1497年にテューダー朝創始者ヘンリ7世のもと、（ B ）父子がブリストルの商人の資金提供によりアジアへの航路探検に出発し、ニューファンドランド・ニューイングランド沿岸に到達した。さらに子は、のちにイギリスがスペイン継承戦争の講和条約で獲得することになる（ C ）湾に辿り着いた。16世紀後半のエリザベス1世の時代になると「新大陸」への関心が高まりをみせ、女王に寵愛されたウォルター＝ローリはエリザベス1世の通称にちなんで命名したヴァージニア地方へ2度にわたり植民団を送った。北大西洋にまたがる、女王の君臨するべき「イギリス帝国」という発想は、同じくエリザベス1世に仕えていたロンドン生まれの（ D ）人ジョン＝ディーにより広まることになる。そのイメージは「新大陸」を（ D ）人が発見したという神話に基づいていた。

イギリス帝国の中心をなした複合国家としてのイギリスの成り立ちは、1536年の（ D ）の合同、1707年のスコットランドの合同という形で進み、1800年のアイルランド合同法を経て1801年のアイルランド合同によって一応の完成をみる。したがって、イギリス帝国はイングランドのみならず、（ D ）、スコットランド、アイルランドが関わった帝国であった。そのうちのアイルランドは、12世紀後半以降イングランドの半ば植民地的な位置づけを与えられ、16世紀にイングランドが海外進出を活発化させるのと同時に、アイルランドへの植民の動きもより強化された。1603年にエリザベス1世が死去すると、スコットランド王だった（ E ）6世が次のイングランド王に即位することになり、イングランドとスコットランドの間で「同君連合」が成立した。この国王のもとで、スコットランドからアイルランドへの入植がさらに規模を拡大させる。近代的市民社会への途を開いたとされるピューリタン革命において独立派を率いて国王側を破り権力を握った（ F ）は、アイルランドのカトリック勢力を激しく弾圧してアイルランドの植民地化をさらに徹底させた。

イギリスは16世紀後半から奴隷貿易を目的とした航海を始め、17世紀頃から経済的な収奪を主な目的に本格的な帝国建設に乗り出した。奴隷貿易の中心は名誉革命後のイングランドにあり、イングランドを中心とするイギリスが17世紀の80年代から100年の間に北アメリカとカリブ海諸島の英領植民地に送った奴隷は約200万人、フランスやスペインに供給した奴隷も50万人を超えるとされる。アイルラ

ンド人は、1780年までイギリス政府により、奴隷貿易を含めた西アフリカとの交易を禁じられた。北米大陸においてイングランドからの植民者が圧倒的多数を占めた17世紀は、先住民の殺戮と土地収奪が熾烈を極め、1608年から10数年の間にニューイングランドの先住民のおよそ9割が入植者のもたらした疫病により死亡したといわれる。18世紀にアイルランドやスコットランドからの移民が増大すると、入植地はさながらイギリス本国における貧困社会の縮図となった。イギリス本国が北アメリカに駐屯するイギリス軍の費用に当てることを目的とした諸措置は、多くの植民者に直接的な負担を与えた。「( G ) なくして課税なし」というスローガンのもと、植民者が本国政府に対して始めた抵抗運動は、アメリカの独立宣言へとつながっていく。アメリカの独立戦争はアイルランドにおける反英運動にも強い影響を及ぼしたが、フランスの援助を得たプロテスタントとカトリックのアイルランド人による1798年の蜂起は鎮圧された。

イギリスは18世紀にムガル帝国の弱体化に乗じてインドに勢力を伸ばし、ヨーロッパにおける七年戦争は、インドにおいてもイギリスとフランスの覇権争いをもなった。最終的に、イギリスはフランス軍を後盾とした ( H ) 太守を破り、フランスはこの戦いを契機にインドシナ進出へ転ずることになる。イギリスは、そのインド統治へアイルランド統治を応用する試みを行った。アイルランドでは、( I ) の疫病による凶作で発生した「( I ) 飢饉」が100万人以上の命を奪い、ほぼ同数の国外移民を発生させたが、その危機をより深刻なものにさせたイギリスの行政官がインド統治を担当した。1877年からインド皇帝を兼任したヴィクトリア女王のもとで、イギリスは世界経済の覇者として君臨する。

その頃、イギリス帝国のなかで人種的に下層に位置づけられた ( J ) は、イギリスによるオセアニア入植以前は30万人から100万人いたとされるが、6万人ほどに減少していた。タスマニアに約4千人存在した ( J ) は、その地において1876年に絶滅する。第二次世界大戦後、ナチスのユダヤ人大量虐殺からジェノサイドという概念を考案したレムキンは、世界史上のジェノサイドの重要な例として ( J ) 殺害に強い関心を抱いていた。この住民の絶滅と前後して、世界はさらにより古典的な意味合いにおける帝国主義の時代に入るのである。